齋藤茂吉全集

第二十一巻

齋藤茂吉全集

第二十一卷

第八回配本（全三十六巻）
齋藤茂吉全集　第二十一巻
定價　千四百圓
昭和四十八年八月十三日　發行
著者　齋藤茂吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店
印刷・精興社　製本・牧製本
落丁本・亂丁本はお取替いたします
© 齋藤茂太 1973

明治大正短歌史

目次

明治和歌革新運動の序幕に至る迄の考察

第一　序論……三
第二　平賀元義……六
第三　橘曙覽……八
第四　大隈言道……一〇
第五　井上文雄……一二
第六　八田知紀……一三
第七　僧辨玉……一四
第八　丸山作樂……一八
第九　僧愚庵……二一
第十　福本日南……二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第十一　僧禮嚴……二五
第十二　海上胤平……二七
第十三　落合直文（附鮎貝槐園）……三三
第十四　新派の各派其の他……三六
第十五　結語……四四
福本日南の事……五三
（福本日南の歿年月日。尾形猛氏より。『日南先生書翰』。）
明治和歌史話斷片……五七
（明治から大正にかけての和歌。新派の和歌。與謝野鐵幹。「明星」。鐵幹と晶子。自然主義運動。佐佐木信綱。其の他の新派歌人。與謝野晶子・北原白秋の『歌壇意識』云々。）
明治大正短歌史概觀
明治天皇。昭憲皇太后……七三
第一章　第一期（明治初年―明治十年頃）……七五

宮中御歌所。御歌所歌人の流派。宮中歌人と民間歌人。三條實美。岩倉具視。八田知紀。井上文雄。大田垣蓮月。

第二章　第二期（明治十年頃—明治二十年頃）……八八

「明治現存三十六歌撰」。「開化新題歌集」。「新題詠歌捷徑」。大八洲學會。西洋僕從。大熊辨玉。近藤芳樹。

第三章　第三期（明治二十年頃—明治三十年頃）……一〇四

「和歌改良論」其他。佐佐木氏の著書。「現在の名家」。和歌作法書。「柵草紙」。和歌の雜誌。雜誌「太陽」。和歌に就きての說。新聞雜誌の歌論。新聞彙報。「めざまし草」。歌界漫談。「早稻田文學」記事。高崎正風。小出粲。稅所敦子。佐佐木弘綱。福田行誡。海上胤平。山縣有朋。作樂・愚庵・禮嚴。

第四章　第四期（明治三十年頃—明治三十五年頃）……一三三

落合直文。佐佐木信綱。正岡子規（竹の里人）。與謝野鐵幹附晶子。いかづち會。若菜會・更衣會等。金子薰園。井上通泰其他。中村秋香・大和田建樹。武島羽衣。子規鐵幹不可並稱說。「文壇照魔鏡」。「文壇笑魔經」。和歌の雜誌・新聞。

第五章　第五期（明治三十六年始頃—明治四十二年）……一六五

「明星」明治三十六年。「明星」明治三十七年。「明星」明治三十八年。「明星」明治三十九年。「明星」明治四十年。「明星」末期。「明星」終刊號。「スバル」初期。森鷗外。佐佐木信綱　竹柏會。根岸短歌會。尾上柴舟。服部躬治。金子薫園。舊派歌人。

第六章　第六期　（明治四十三年頃—大正三年頃）……一九五

竹柏會。金子薫園。尾上柴舟。窪田空穗。若山牧水。前田夕暮。北原白秋。吉井勇。土岐哀果。石川啄木。水穗・御風・寛。雜誌「創作」。雜誌「詩歌」。雜誌「朱欒」。「アカネ」・「アララギ」。

第七章　第七期　（大正三年頃—現在）……二二五

雜誌「アララギ」。舊根岸短歌會系。諸歌人。諸流派と其雜誌。口語短歌。無產派短歌。

第八章　第八期　（現在—　）……二三三

明治大正短歌史概觀餘錄

一……二三五

（「明治大正短歌史概觀」。佐佐木信綱・久保猪之吉兩氏より、其他。三條西季知の歿年月日、其他。阪井久良岐の狂歌。『參商』の傍訓。『無產派

短歌』の項。「概觀」の由來。詩歌史研究の趨勢。）

二 ……二四二

（雅號變名に就て。村田利明君より。三條實美の名、其他。花田比露思氏より。三たび季知の歿年月日。鷗外先生の句。）

三 ……二五二

（『實美』の讀方。『具視』の讀方。『美靜』の讀方。『鶴所』の讀方。土屋文明氏より。與謝野寛の「相聞」。諸雜誌創刊廢刊の年月日。その他。）

四 ……二五七

岩倉具視。矢代東村氏より。歌學新論。市毛氏より。岡田氏より。

五 ……二六三

雲林院。誤記の歌一つ。歌よみに與ふる書。

六 ……二六七

矢代氏の反駁に就て（一）。矢代氏の反駁に就て（二）。矢代氏の反駁に就て（三）。矢代氏の反駁に就て（四）。矢代氏の反駁に就て（五）。

山縣有朋の歌 ……二八五

（山縣有朋の事。勅批の歌二首。勅批の歌一首、明治天皇。山縣有朋の歌

に就て。）

明治大正和歌史

第一章　德川歌壇連續期、開化黎明期（明治初年—明治十年頃）……二九三

宮中御歌所。明治歌集、明治開化和歌集。開化新題歌集。横文字百人一首。

第一期の歌人の歌。

第二章　黎明次期、反動出現期（明治十年頃—明治二十年頃）……三〇五

明治現存三十六歌撰正續篇。

第三章　國粹論改良論交錯期、新派和歌胎生期

（明治二十年頃—明治三十年頃）……三一六

井上・佐佐木氏等の論。和歌改良論其他。言文一致歌。第三期の歌人。

第四章　新派和歌の運動（明治三十年頃—明治三十五年頃）……三二九

落合直文、淺香社。佐佐木信綱、竹柏會。正岡子規、根岸短歌會。與謝野鐵幹、新詩社、附晶子。いかづち會、若菜會其他。金子薫園其他。議論。

第五章　明星隆盛期、スバル初期（明治三十六年頃—明治四十二年頃）……三五一

新詩社。佐佐木信綱、竹柏會。根岸短歌會。その他の歌人。

第六章　自然主義的近代主義的傾向期（明治四十三年頃—大正三年頃）……三五七
金子薫園。尾上柴舟。窪田空穗。若山牧水。前田夕暮。北原白秋。吉井勇。土岐哀果。石川啄木。其他の歌人。
第七章　アララギ隆盛期（大正三年頃—現在）……三六八
アララギ。諸歌人。
第八章　結語……三七六

アララギ二十五年史

第一節　アララギ第一卷（明治四十一年）……三八五
馬酔木。アララギ創刊の經緯。第一卷の歌風。「濃霧の歌」。第一卷の歌人。新歌風の胚胎。第一卷の文章。
第二節　アララギ第二卷・第三卷（明治四十二年—明治四十三年）……四〇〇
アララギ發行所。第二卷の文章。萬葉學。第二卷の歌。「九十九里濱」。第三卷の歌人。第三卷の歌。新傾向。第三卷の研究論文。
第三節　アララギ第四卷・第五卷（明治四十四年—明治四十五年）……四一五
第四卷の作者。第四卷の歌。左千夫の歌風。「子規十周年記念號」。東京根岸短歌會。第五卷の文章。一般歌壇との交流。柿の村人對左千夫。左

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

千夫の歌論。「滅びの光」。節の歌。新傾向の歌。經營上の努力。「十周年記念號」。

第四節　アラギ第六卷・第七卷　（大正二年—大正三年）……四四五

左千夫の死。アララギ叢書。「馬鈴薯の花」。會員の組織。第六卷の文章。第六卷の歌。「獨都より」。「左千夫追悼號」。遲刊、休刊。經營の一紀元。アララギ畫會。第七卷の文章。「鉞の如く」。第七卷の歌人と歌風。アララギと一般歌壇。

第五節　アララギ第八卷・第九卷・第十卷　（大正四年—大正六年）……四六九

第八卷の文章。長塚節歿。アララギ短册會。新進の活躍。歌壇の主潮流形成。第九卷の文章。第九卷の歌。夏目漱石歿。第十卷の文章。第十卷の歌。歌風正途に就く。

第六節　アララギ第十一卷・第十二卷・第十三卷

（大正七年—大正九年）……四九五

第十一卷の文章。第十一卷の歌風。アララギ調。アララギ歌風への批難。第十二卷の文章。第十二卷の歌風。第十三卷の文章。新進の歌。

第七節　アララギ第十四卷・第十五卷・第十六卷・第十七卷

（大正十年—大正十三年）……五二〇

第十四卷の文章。第十四卷の歌。歌風の變化。萬葉集叢書。「長塚節全集」。第十五の文章。第十五卷の歌人と歌。赤彦の進境。赤彦調。「震災號」。第十六卷の文章。第十六卷の歌風。アララギ完成期。第十七卷の文章。日光對アララギ。震災の歌。

第八節　アララギ第十八卷（大正十四年）……五四四

アララギ安居會。アララギ歌壇の盛觀。第十八卷の歌風。

第九節　賣捌所・印刷所・會計・表紙畫・書肆……五五七

第十節　アララギ第十九卷より第二十五卷に至る（大正十五年—昭和七年）……五七二

第十九卷。島木赤彦歿。第二十卷。第二十一卷。第二十二卷。第二十三卷。第二十四卷。第二十五卷。昭和七年現在のアララギ歌人。大正十五年—昭和七年同人諸論文、雜筆。アララギの特色。赤彦歿後のアララギ歌風。アララギズム打倒の聲。今後のアララギ。

歌壇事項

明治四十一年（三九九）　大正四年（四七七）　大正十一年（五三三）　昭和四年（五九四）

明治四十二年（四〇七）　大正五年（四八七）　大正十二年（五三八）　昭和五年（五九五）

明治四十三年（四一五）　大正六年（四九四）　大正十三年（五四四）　昭和六年（五九六）

明治四十四年(四三一)　大正七年(五〇三)　大正十四年(五五六)　昭和七年(五九七)
明治四十五年(四四四)　大正八年(五一二)　大正十五年(五九一)
大正　二　年(四五五)　大正九年(五一九)　昭和　二　年(五九二)
大正　三　年(四六八)　大正十年(五二五)　昭和　三　年(五九三)
後記……五九九

明治和歌革新運動の序幕に至る迄の考察

第一　序論

明治和歌革新運動といひ、または新派和歌運動と謂ふは、明治三十年前後を起點として一齊に起つた和歌の改革運動を指していふのである。今は既に『新派』といふことゞを聞くことが稀となつたが、私の少年の頃には、最も活潑にこの『新派』のことゞを聞いたものである。そしてある時にはその新派の名義爭ひに似た口吻を聞くこともあり、例へば與謝野夫人の如きは、『伊藤左千夫さん達のああいふ擬古歌は私どもは新派とは認めません』などと云つたりしたこともあるのである。併し今では『新派』の語ももはや陳腐になつてしまひ、縱しんばそこに幾つかの流派があつても、現今の歌壇は一樣に新派の歌壇であるといつてよいやうになつたのである。

此の明治三十年前後に起つた、新派和歌の運動は本邦の和歌史のうちでも注目に價するものと私はおもふ。なぜかといふに、明治から大正にかけての歌壇はその隆盛な點に於てこれまでの和歌の歷史のうへに其の比を見ないのである。そしてその隆盛を來した根源は新派和歌の運動にあつたからである。

私はいつか此の新派和歌の運動の起つた過程について少しく精しく考へて見ようとおもつたことがある。そしてその材料をも蒐集して居た。然るに不幸にもそれらの材料も盡く焚燒してしま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook